

鄭先生の第28回料理教室報告

朝鮮料理で交流

きびしい寒さのつづく日の料理教室でした。でも、公民館の料理講座室の中は朝鮮語・韓国語・中国語と、三か国語の飛び交うにぎやかなふんいきに包まれました。

というのも鄭京福先生の夫君のお誘いで、韓国語を学ぶ人たちの参加があったからです。鄭先生は、つい昨年九月まで中国に住んでいたため、朝鮮語と中国語のできるバイリンガル。その上に、韓流の女性たちが加わった交流でした。

さて、学んだ料理は四品。ダシダ(朝鮮風牛から作ったダシ)を除いて、一見平凡な食材

に見えても、つくり出される味はいはやはり中国の朝鮮風のものでした。

「海帶湯」「魚香肉絲」「炒辛青椒牛肉」「拌菠菜」の四種は、文字面で見ると平凡に見えますが、それぞれ味わいの違いを知ることになりました。

たとえば「拌菠菜」は法蓮草のおひたしですが、ふた色の調理

調理法のあるが、味わいの深さを知らぬ

の仕方ではこれはまったく日本にはない味わいを作り出していました。

「海帶湯」にしてもしかり。深く長く煮込む若布のスープは、まず強火で油いためをした後の長時間の煮込みスープでしたが、ほんとに日本には存在しない味わいでした。

材料の事前の調理法にしてもそうです。牛肉に酢を加えて血ヌキをする。豚肉は水洗いをして粉をまぶすなど、事前の調理の仕方が味わいを深くしていることを知りました。

鄭先生は、料理づくりの仕事に長く携わってこれ



ただけに、お持ちの調理法の深さををもっと教わりたと思ったものでした。

寒さのせいか、予約された人の参加が見られず、盛況といえなかつたのは残念でした



短信

総社・日本語教室が映画会

日本語の学習だけではなく楽しい会を、という方針を掲げる総社日本語教室。帰国者の受講者は4人ですが、講師

団17人、サポーター10人という人材が集まる教室です。このほど梅のお花見会をやめて、映画会を計画しています。中国映画「北京ヴァイオリン」を2月19日に上映します。

事務局開設などを論議

2月理事会から

★専用の事務所を持たない岡山支部。やはり、常時集まれるところが必要だという声が出されました。今後、組織拡大の展望も念頭に入れないながら、必要性や維持の課題などを、長い時間かけて論議を一つづけていくことになりました。

★ベネズエラ代表団歓迎交流集会在3月23日に開かれます。岡山県AALA(Aジア・アフリカ・ラテンアメリカ)が呼びかけ人となつて実行委員会が組織されました。岡山支部も実行委員会へ参加しています。

アイデア募集

第30回を迎える中国料理教室へ

2002年の11月から始まった中国料理教室。中国の食文化を、家庭料理を学ぶことで知ろうというねらいを持っています。次々回で30回目の教室を記念して、新しいアイデアを募っています。豪華な食材での料理をつくらうとか、何百種類もの多彩な種類を持つ餃子のなかから選んで楽しい作り方を知らう、野外料理で、野生味あふれる料理をくとかい

ろいろな提案が出されていますが、ここで会員の皆さんからのアイデアをも募集することにしました。ふるってご提案ください。



留学する若者へ

岡山支部理事長からメッセージ

旭公民館入門クラスと初級で、しっかり中国語を学んだ高校生の前原宏美さんが、このほど高校を卒業。二月から南京大学へ留学します。これを開いた初級の同級生たち全員が、激励の声を送る会を開きました。

この日であって、老師の一人であった竹内和夫さん（岡山支部理事長）から彼女へ送られたメッセージです。

前原さん

就実高校ご卒業おめでとうございます。でも卒業式には出られないとのことですね。去年あなたが南京大学に留学するというのを聞いて、おどろき、また大へんうらやましい、よくもこんな勇気が、どこに〜と思いました。

二〇〇四年十月二十九日、旭公民館にお母さんといっしょに来られてから、ずっと欠席することなく熱心に勉強をつづけてこられました。二〇〇五年三月十八日はたしか卒業式の関係で、一日だけお休みでしたけれど。

いつも金曜日は、勉強が終わる八時半ごろには、お母さんの車が公民館の庭に待っていますね。おなじように榊原のおばあちゃんも息子さんの車が待っていましたね。

きょうは送別会。出席できないのがとても残念です。国民救援会岡山県本部委員会などで午後からずっと夜まで、会長としての役目がありますので。

この送別会を準備して下さった同僚の温かい友情、そして郭老師（初級）のことも思い出して、ぜひ中国に親友をつくって、南京から日中友好協会岡山支部に「南京だより」を送ってくださることをお願いします。

健康に気をつけて、日中友好のかけ橋になってください。
二〇〇六年一月二十八日
竹内和夫



南京大学に留学する前原宏美さん(中央)と郭志華老師

日中友好協会岡山支部

《HP 新アドレス》

<http://rizhong.web.infoseek.co.jp/>

《新Eメール》

rizhong86@hotmail.co.jp

総社でも「残留日本人孤児」のための日本語教室を開きたいので、講師として協力して頂けないだろうかというお話を西森・光畑さんから伺い、二つ返事で引き受けることにした。

私をそうさせたのは、私も旧満州からの引揚者であり、住んでいたところは正式には関東州（日露戦争後、ロシアに代わって日本が支配することになった植民地）の大連で、開拓団の人たちが住んでいた所に比べて格段条件が良いところだったが、新聞紙上に中国からの一時帰国の人の名前が載ると、結構大連に居住している孤児の人もいて、自分ももしかすると孤児になっていたかも知れないという思いを強く抱いていたからである。

私が国民学校（1941年から小学校の呼び方が変わった）の2年生の時が敗戦で、8月8日ソ連が参戦してからというもの、奥地の開拓団の人たちが大勢南へ向かって避難してこられた。親類・知人等がある人たちはよかつたが、無人はちようど夏休みでもあったので、学校へひとまず落ち着かされた。当時、私の父も罹ったが、発疹チフスが流行し、開拓団の人たちが大勢罹患して犠牲になった。葬式を出すだけのお金が無いため、戦時中に校庭の片隅に掘られていた防空壕に、アンペラ（高粱等の茎で編んだ敷物）一枚にくるまれて投げ込まれるような状態で埋葬されていた。冬になると足の先がむき出しになり、犬が吠えたような跡も見え、恐る恐る覗きにいったのをいまでも鮮明に覚えている。

引き揚げて帰って、社会科の教員になり、戦争関係の書物を精力的に買い求めた。現在は、中国残留孤児に関する書物もたくさん出ているが、もう大分古い話だが、非常に残酷・悲惨だと思つた

総社日本語教室・講師として参加するようになったこと



宝福寺を見学する総社日本語教室の皆さん

のは、飯塚浩二先生（戦後有名になった著作で「日本の軍隊」日本の精神風土等の著者）の満蒙紀行（飯塚浩二著作集第10巻、平凡社）中の一文である。それは、1945年6月7日付けの記で、少し長くなるが引用してみる。
狸木斯（チャムス）駅のプラットフォームで待っているところへ、牡丹江方面からの列車が入ってきた。そこで、図らずも、いま思い出しても胸の痛む光景を、目のあたりに目撃するめぐり合わせになった。
列車が止まって大勢の客がぞろぞろ降りてくる。当たり前の話だが、この日佳木斯駅に降りた客の何割かは当たり前前の旅行者ではなかった。私は客観的情勢がこまで煮つまつてしまった段階で、まさかこんな無残な、無責任な措置がとられていようとは想像して見たこともなかったし、誰からも聞かされていなかっただけに、よけいショックが大きかったわけだが、降りても改札口へ急がず、すぐ団体らしいなとわか

る一群の人たちは、内地からの移民団であった。本土空襲の罹災者たちだという。（同著408頁）
すでにドイツが降伏し沖繩戦もほとんど形がついていて、8月には敗戦というときに、戦災で全てを失った人たちが風呂敷包ひとつを持って開拓団に入団して6月にやってきたという事実、国家というものに対して激しい怒りを感じずにはおれない。その彼らを襲った言語に尽くせない逃避行から戦後の苦勞については、多くの書物・テレビ等マスメディアで報道されている。
よく裁判で、第三の棄民は許せないというのが、戦時中に置き去りにされたこと、戦後「戦時死亡宣告」を受けたことの前に、そもそも旧満州への開拓団・満蒙青少年義勇軍等に対する国家の措置・責任が問われなければならない。
6月に始まった総社の日本語教室は週二回の講座で、一回は大体二時間程度で行なっている。生徒の年齢が高く、記憶力が落ちていくから、あいうえおから始めるのは大変だが、みんなたいへん熱心で、和気あいあい笑顔が絶えない。教えるこちらもうりやうりがあり、かえって教えられることが多い。教えることは学ぶこと」という言葉の真実をいやというほど知らされている。
当日はあいにくの雨だったが、吉備路の古墳・名刹を訪ね錦秋を満喫できた。昼の弁当には、生徒が餃子・ぶたまん等をたくさん作って来られてふるまってくれた。
本当に好吃了！（ハオ チーラ！）だったよ。

次回の新聞送付作業は

2月21（火）1時半から民主会館で行ないます。

前回お手伝いくださった方々です。